

投資，投機，群集行動（2）

吉 澤 昌 恭*

4. 方法論的考察

4.1. 野口 vs. 「市場原理主義批判」者

(1) 見解の異同の明確化と反証可能性

序で、1997（平成9）年に起った、アジアの通貨・金融危機の後において尚、「金融の自由化は必ず利益をもたらす」ということを信じる人がいなくなったわけではなく、野口旭氏がそのひとりである、ということを指摘した。以下では、この野口氏の見解と、「金融の自由化は必ず利益をもたらす」とは信じない人々の見解を比較考量することにしよう。そして、4.2.では、方法論上の議論にかなり深く立ち入ることになろう。

さて、野口氏は、「論争が論争として成立するためには、まずは見解の対立を対立として明確化することが必要である⁽⁴⁹⁾」と述べている。まことにもっともな主張であり、筆者も野口氏のこの主張に完全に同意する。

そして、野口氏は、カール・ポパーと「反証」に言及して、次のように述べている。

「科学哲学における反証主義を唱えたカール・ポパーが論じているように、人々がより正しい認識に到達しうるのは、既存の認識の誤りが明らかになるときにおいてのみである。科学的命題が『反証可能』でなくてはならないというのは、まさしくそれを意味している。そして『論争』とは、その『誤りから学ぶ』⁽⁵⁰⁾ことのできる機会を、最も多く提供できる場なのである。」（傍点は吉澤が付した。）

上の引用文中、傍点を付した部分の如き「素朴な」反証主義は、とっくの昔に打

* 広島経済大学経済学部教授

(49) 野口 旭『経済学を知らないエコノミストたち』日本評論社、平成14年、53頁。

(50) 野口 旭、同上、53頁。

ち倒されてしまった、ということをも4.2.3.(2)で論ずる。そして、そうするためには、ヒュームの主張にまで遡る必要がある。

しかし、それに先立って、野口氏の見解と、野口氏が批判する人々（つまり、「市場原理主義批判」者）の見解の相違を明らかにしておこう。

(2) 野口：通貨危機の原因としての固定相場制

通貨危機の原因は固定相場制にある、と野口氏は言う。野口氏は次のように述べている。

「確かに、資本移動規制や為替規制を禁止的なまでに厳格に行えば、通貨危機は生じないという意味で、自由な資本移動は通貨危機の必要条件ではある。とはいえ、自由な資本移動を保証するすべての国が、通貨危機の可能性に直面しているわけではない。日本やアメリカには資本移動の規制はほとんどないが、そこで通貨危機が起きる可能性はほぼゼロに近い。つまり、通貨危機には、もう一つの重要な必要条件が存在するのである。それは、為替レートの固定性、すなわち通貨制度としての固定相場制の採用である。⁽⁵¹⁾」

もし、以上のことが正しいとすれば、多くの国が固定相場制を放棄すればするほど、国際金融システムのシステムック・リスク（野口氏の表現によれば、グローバル資本主義の危機）が発生する可能性は減少する。野口氏は、今日ではグローバル資本主義の危機は過去のものになった、と断じている。

「現在では、為替レートの固定制を維持する主だった国や地域は、中国、香港、マレーシア等、数えるほどになりつつある。それは、通貨危機の発生可能性が、世界的にますます狭まりつつあることを意味する。つまり、『グローバル資本主義の危機』は、もはや完全に過去のものとなりつつあるのである。⁽⁵²⁾」

そして、貿易自由化に賛成しながら資本自由化に反対することは許されない、と野口氏は追討ちをかける。

『教科書的枠組み』に依拠する限り、資本移動を制限すべき経済学的根拠が存在

(51) 野口 旭，同上，26頁。

(52) 野口 旭，同上，28-29頁。

しないことは明白であろう。少なくとも、貿易自由化に賛成しながら資本移動自由化に反対することはできない。それでは、資本移動自由化を論難する経済学者たちは、いったい何を問題にしているのだろうか。

それに関して…中略…ロドリック論文〔4.1.(3)で、このロドリック論文について論じる、吉澤註〕は、金融市場は財・サービス市場とはその不完全性の度合いが大いに異なるので、貿易の延長で資本移動を取り扱うことは適切でないと論じる。そして、その『不完全性』の例として、情報の非対称性やモラルハザード、資本取引における期間のミスマッチ、群衆行動に基づく資産価格の不安定性と伝播効果等を指摘する。⁽⁵³⁾

(3) 「市場原理主義批判」者の論理

「市場原理主義」が何を意味するのか、についてのより立ち入った議論は、4.3.1.まで先送りすることにしよう。ここでは野口氏によって言及された、ロドリック論文の中身を紹介しておくことにしよう。

Should the IMF Pursue Capital-Account Convertibility? に収録された第7論文「誰が資本自由化を望むのか」⁽⁵⁴⁾で、ロドリックは、「財・サービス市場」と「金融市場」の違いを強調している。

「財・サービス市場が教科書に書かれているように完全である、ということは稀なことであるが、多くの場合、それは、一定程度の効率性並びに予測可能性と両立可能な形で作動する。余りにも多くの場合、金融市場はそうに作動しない。情報の非対称性・不確定性を秘めた市場の不完全性・（「非合理」とまでは言えないにしても）限定された合理性、といったものから生じる市場の失敗は、金融市場特有の病である。⁽⁵⁵⁾」

資本の流出入規制を撤廃して、国内金融市場と国際金融市場を連結することからいかなる利益が得られるのか、未だ十分に明らかにされていない一方で、そうした

(53) 野口 旭，同上，105-106頁。

(54) Rodrik, Dani: Who Needs Capital-Account Convertibility?, in; *Should the IMF Pursue Capital-Account Convertibility?*, Essays in International Finance No. 207, May 1998, International Finance Section, Department of Economics Princeton University, Princeton, New Jersey. (岩本武和監訳『IMF 資本自由化論争』岩波書店，平成11年)。

(55) Rodrik, Dani, *ibid.*, P. 57. (同上，112頁)。訳文には変更を加えた。

措置は、次の2つのリスクを生じさせる、とロドリックは言う⁽⁵⁶⁾。

1. 各国の借り手がアクセスできる流動性の量が増加するため、市場心理の反転 (turnaround in market sentiment) が起れば、常に、その影響は大幅に増幅される。
2. ある市場から別の市場への伝染 (contagion) を介して、システムミック・リスクが増大して行く。

金融市場の病、とりわけ、資本逃避 (capital flight) に見舞われた国では、ファンダメンタルズの変化では到底説明できないような、はなはだしい危機が生じることになる。ロドリックは次のように述べている。

「すべての金融危機の基礎には、すくなくともある程度ファンダメンタルズの変化があるが、危機の大きさは、ファンダメンタルズのありうべきいかなる変化とも釣合わないほど大きいことが多い。たとえば、一九九七年のアジアへの資本移動の急速な反転は、ファンダメンタルズでは説明不可能である。」⁽⁵⁷⁾

上で見たロドリックの主張は、本稿前半部分で論じた、ケインズ・佐伯・イートウェル・テイラーたちの主張と軌を一にするものである。

こうした説と野口説のいずれに軍配を上げるべきなのであろうか？ 否、そもそも2つの説の優劣を決することは可能なのであろうか？

4.2. ヒュームの衝撃

4.2.1. バケツとサーチライト

(1) 科学のバケツ理論

ポパーは、知識理論 (あるいは認識論) を二種類のものに区別する。「科学のバケツ理論」と「科学のサーチライト理論」がそれである。⁽⁵⁸⁾ 「科学のバケツ理論」によれば、知識 (knowledge) よりも知覚 (perception) が先行する。そして、知識

(56) Rodrik, Dani, *ibid.*, P. 64. (同上, 123頁)。

(57) Rodrik, Dani, *ibid.*, P. 58. (同上, 113-114頁)。

(58) Popper, Karl R.: *The Bucket and the Searchlight: Two Theories of Knowledge*, in: *Objective Knowledge, An Evolutionary Approach*, Oxford University Press, Oxford 1972, revised ed. 1979. (森 博訳『客観的知識 —— 進化論的アプローチ』木鐸社, 昭和49年)。

は、「集積され知覚」から成り立っているか（素朴経験主義），さもなければ「吸収され・貯蔵され・分類された知覚」から成り立っている（ペーコンやカントによって支持された見解）。

科学のバケツ「理論の出発点は，世界について何事かを知ったり言ったりできるためには，それ以前にわれわれはまず知覚 —— 感覚的经验をしなければならない，というまことしやかな説である。この説からはおのずと次のような考えが出てくると思われる。すなわち，われわれの知識，われわれの経験は，集積された知覚から成り立っているものである（素朴経験主義）か，さもなければ吸収され貯蔵され分類された知覚から成り立っているものであるという考え（ペーコンによって支持され，カントによってよりラディカルなかたちで支持された見解）がそれである。⁽⁵⁹⁾」

（2）科学のサーチライト理論

ポパーは，「科学のバケツ理論」は誤りである，と言う。なぜなら，科学において決定的な役割を演ずるのは知覚ではなく観察であり，また，観察には，常に，問い・問題・何かしら理論的なもの（something theoretical）が先行する，というのがその理由である。

ポパーは，「科学のサーチライト理論」の支持者である。そこでは，①観察は，何かしら理論的なもの，即ち，仮説を必要とし，②この仮説が「いかなる種類の観察を行うべきか」を照らし出すサーチライトの役割を果すことになる。

「いかなる種類の観察をなすべきか —— われわれの注意をどこに向けるべきか，どの点に関心をもつべきか —— をわれわれが学びとるのは，もっぱら仮説からだけである。それゆえ，われわれの案内人になり，われわれを新しい観察結果へと導いていくのは，仮説である。

これは，私が（『バケツ理論』に対置して）『サーチライト理論』と呼んだ見解である。⁽⁶⁰⁾」

4.2.2.で，「バケツ理論」の陣営に属する最も重要な人物である，ヒュームの主張に焦点を当てることにする。その後，「サーチライト理論」の陣営に属する，ポ

⁽⁵⁹⁾ Popper, Karl R., *ibid.*, P. 341. (同上, 379頁)。

⁽⁶⁰⁾ Popper, Karl R., *ibid.*, P. 346. (同上, 385頁)。

パーとラカトシュについて論ずることにしよう。

4.2.2. ヒュームの因果律批判とその帰結

(1) ヒュームの因果律批判

ロック (John Locke) によって創始された経験主義的認識論は、バークリー (George Berkeley) を経て、ヒュームによって「完成」された。

ロックの認識論の出発点は次の2つであった。

1. 我々に生得観念はない。
2. すべての知識は経験に由来する。

ヒュームは、ロックの準備した道を進めるだけ進んで、「我々は経験と観察からは何事も学び得ない」という惨憺たる結論へと追いやられていったのである。

* * *

ヒュームは、その著『人性論』⁽⁶¹⁾を、知覚 (perception) に関する議論から始めている。

およそ人間の心に現れる一切の知覚は、印象 (impression) と観念 (idea) に区分できる、とヒュームは言う。印象と観念の相違は、それらのものが心に現われる時の勢いと生気の差にある、というのである。極めて勢いよく烈しく心に入り込んでくる知覚が「印象」と命名される。それに対して、「観念」の勢いは弱い。

次に、知覚は「単純な (simple)」知覚と「複雑な (complex)」知覚に区別される。⁽⁶³⁾単純な知覚 (即ち、単純な印象もしくは単純な観念) とは、区別又は分離を許さぬものである。それに対して、複雑な知覚 (複雑な印象もしくは複雑な観念) は、部分に区別できる、というのである。例えば、ここにひとつの「りんご」とあると

(61) Hume, David: *A Treatise of Human Nature, Being an Attempt to Introduce the Experimental Method of Reasoning into Moral Subjects*, 1739–1740, in: *David Hume, The Philosophical Works*, ed. by T. H. Green and T. H. Grose, 4 Vols, London 1874–1875, Scientia Verlag, Aalen 1964. (大槻春彦訳『人性論』岩波文庫, 昭和23–27年)。

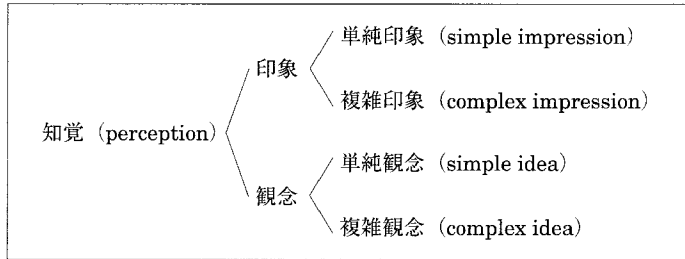
(62) Hume, David: *David Hume, The Philosophical Works*, Vol I, p. 311. (『人性論』第1分冊, 27頁)。

(63) Hume, David: *ibid.*, p. 312. (同上, 28頁)。

しよう。そのりんごの色・味・香りは、りんごの内に合一された性質ではあるが、それらは互いに区別できるものである。

以上を整理すると図2のようになる。

図2



続いて、ヒュームは、単純印象と単純観念の類似性を指摘する。単純印象には、ひとつひとつ類似した単純観念があり、単純印象と単純観念の間には対応関係が存在する、とヒュームは言う。⁽⁶⁴⁾

しかし、複雑印象と複雑観念については事情が異なっている、とヒュームは述べている。

「複雑観念の多数は決して、自己に対応する印象を過去に持たず、また複雑印象の多数は決して観念に正確に模写されないのである。私は、黄金の舗道と紅玉の城壁とを有する新イェルサレムのような都市を心の中で想像できる。が、このような都市は未だ嘗て見たことがない。また私は嘗てパリを見物したことがある。とはいえ私は、街路及び家並を一つ残らず真実のままの正しい割合で完全に再現するようなパリ市の観念を造り得る、と断言するであろうか。」⁽⁶⁵⁾

* * *

『人性論』第1編第1部第3節で、記憶観念と想像観念の差異が論じられている。⁽⁶⁶⁾

いかなる印象もひとたび心に現われるなら、観念として再び心に出現するもので

⁽⁶⁴⁾ Hume, David: *ibid.*, pp. 312–313. (同上, 29–30頁)。

⁽⁶⁵⁾ Hume, David: *ibid.*, p. 313. (同上, 29–30頁)。

⁽⁶⁶⁾ Hume, David: *ibid.*, pp. 317–319. (同上, 36–38頁)。

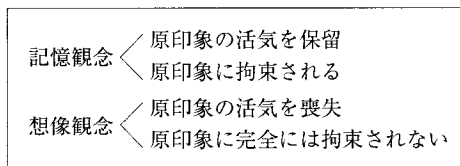
ある、とヒュームは言う。そして、その現われ方には二通りある、というのである。

1. 新しく出現するに当って、初めの活気を多分に保留して、印象と観念の中間の趣きを示す場合
2. 最初の活気を全く失って完全な観念となる場合

ヒュームは、上記の1を「記憶」と呼び、2を「想像」と呼ぶ。そして、記憶観念も想像観念も、対応印象が先行しない限り、心に出現し得ない、と言う。しかし、記憶観念と想像観念の間には、当然のことながら、違いもある。想像は「原印象」に拘束されないのに対して、記憶は「原印象」に拘束されている。

以上、記憶観念と想像観念についての議論を整理すれば、図3の如くなる。

図3



記憶観念は元の印象の活気を保留していると同時に、その印象によって拘束されている。それに対して、想像観念は元の印象の活気を失ってしまっているが故に、その印象に拘束されることもそれだけ少なくなる。従って、人は、「想像」を通じて、「翼を持つ馬」の観念や、「火焰を吐く竜」の観念、更には、「雲を突く巨人」の観念を作り出すことができるのである。

かくして、ヒュームによれば、想像の機能は単純観念の分離・接合に存する、ということになる。

「想像はあらゆる単純観念を分離すると共に、好むままの形態に再び接合することができる。⁽⁶⁷⁾」

さて、観念の接合に関して、ヒュームは次のように述べている。

⁽⁶⁷⁾ Hume, David: *ibid.*, p. 319. (同上, 38頁)。

「観念接合若しくは観念連合がもたらす結果のうちで最も注目すべきものは、思惟及び推理の主題として普通であり且つ概して単純観念間の或る接合原理から起るような複雑観念である。このような複雑観念は関係、様相、実体に区分できる。⁽⁶⁸⁾」

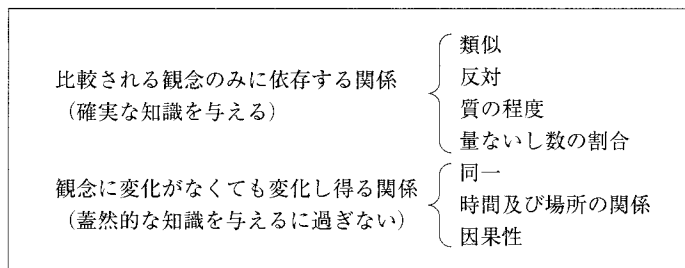
「関係」「様相」「実体」という3つの複雑観念の内、本稿と関わりがあるのは「関係」である。

* * *

ヒュームは、哲学者が研究の対象となし得る関係を7つに区分する（『人性論』第1編第3部第1節）。

「およそ哲学的関係には七つの異なる種類がある。即ち、類似・同一・時間及び場所の関係・量ないし数の割合・或る質の程度・反対・因果性である。ところでこれらの関係は、これを二つの級に区分することができる。即ち、比較される観念に全く依存する関係と観念に何等の変化もなくして変化し得る関係との二つである。⁽⁶⁹⁾」

図 4



7つの関係の内、「比較される観念のみに依存する関係」に分類されるのは、類似 (resemblance), 反対 (contrariety), 質の程度 (degrees in any quality), 量ないし数の割合 (proportions in quantity or number) の4つである。これら4つの関係のみが確実な知識 (knowledge) を与える、とヒュームは言う。

それに対して、同一 (identity), 時間及び場所の関係 (relations of time and

⁽⁶⁸⁾ Hume, David: *ibid.*, p. 321. (同上, 42頁)。

⁽⁶⁹⁾ Hume, David: *ibid.*, p. 372. (同上, 120頁)。

place), 因果性 (causation) の3つは, 観念をいささかも変化させることなしに変化させ得る関係であり, ヒュームによれば, これら3つの関係についての我々の知識は蓋然的なもの (probability) に止まらざるを得ない。

そして, これら3つの関係の内, 「同一」と「時間及び場所の関係」の2つは感官に直接提示されているものを超えることはない, とヒュームは言う (『人性論』第1編第3部第2節)。

「二つの事物が関係と共に感官に顕れているとき, 我々はこれを推理と呼ぶより寧ろ知覚と呼ぶ。蓋し, この場合には思惟は少しも行使されない。いや, 正しく言えば如何なる〔心的〕活動もない。ただ, 感覚器官を通じて為される印象の単なる受動的な容認があるのみなのである。さて, かような考え方に従えば, 同一関係並びに時間及び場所の関係に就いて為し得る観察は, いずれも推理として受け取るべきではない。何故なら, これらの観察のいずれに於ても心は, 事物自身の実在を発見するためにせよ, 事物間の関係を発見するためにせよ, 感官へ直接に顕れたところを越えるに及ばないからである。」⁽⁷⁰⁾

因果性の場合には事情が異なる。それは感官に提示されたものを超えている。

「単なる観念に依存しない三つの関係の中では因果性だけが, それを辿って感官を越えることのできる唯一の関係である。即ち, 見もしないし触わりもしない存在しないし事物に就いて告げる只一つの関係である。」⁽⁷¹⁾

* * *

いよいよ議論は核心部分に迫ってくる。

関係は複雑観念であり, また, 複雑観念にはそれに対応する複雑印象が常に存在するわけではなかった。それでは「因果性」の観念に対応する原印象は存在するであろうか? 「存在しない」というのがヒュームの答えである。

原因と考えられる事物Aと, 結果と考えられる事物Bを観察することによって, 次の2つのことが看取される。

(70) Hume, David: *ibid.*, p. 376. (同上, 126頁)。

(71) Hume, David: *ibid.*, p. 377. (同上, 127-128頁)。

1. 事物Aと事物Bは接近している。
2. 事物Aは、時間的に、事物Bよりも先に存在する。

これら2つのことだけでは、「因果性」の観念を説明するには不十分である。なぜなら、ある事物が他の事物に「接近し」且つ「時間的に先行」しながら、前者が後者の原因とは考えられないような場合が存在し得るからである。およそ因果性ないし因果関係について語る場合には、「必然的結合 (necessary connexion)」が問題とされねばならないのである。

視野を複数の事例へと拡大してみればどうなるだろうか？ つまり、ある事物Aが起った時にはこれに続いて事物Bが起り、こうしたことがくり返して観察されたらばどうなるだろうか？ 事物Aと事物Bの「恒常的連接 (constant conjunction)」が一旦観察されてしまえば、人間の心はそのことによって限定を受け方向づけられてしまう、とヒュームは言う。そして、そこからAとBの「必然的結合」の観念が発生する、というのである（『人性論』第1編第3部第14節）。

「この反復たるや、あらゆる点に互って同一であるのではなく、新しい印象を産み、依って以ていま検討中の観念を産むのである。何故なら、頻繁な反復ののち私は見出すが、事物の一つが出現すると、心は、該事物に日ごろ伴うものを考えるように、しかもこの日ごろ伴うものを、最初の事物との関係のために〔こうした関係の無いものより〕強く照らし出して考えるように、習慣によって限定されるのである。然らばこの印象即ち限定こそ必然性の観念を私に供与するものである。」⁽⁷²⁾

つまり、「原因」の観念、「結果」の観念、そして「必然的結合」の観念は、2つの事物の「恒常的連接」の観察を契機として、想像によって生み出された観念である、というのである。従って、それらに対応する原印象は存在しないのである。

(2) 非合理的信念の奔流

『人性論』の第1編第3部第7節から第10節にかけて、「信念 (belief)」が論じられている。同第7節の冒頭で、事物の観念はその事物の信念の本質的部分であるが全体ではない、と述べられている。というのも、我々は、信ずることのない多く

⁽⁷²⁾ Hume, David: *ibid.*, pp. 450–451. (同上, 241–242頁)。

のものを想うことができるからである。そして、「ある命題を信じる」と「ある命題を信じない」の相違はどこにあるのか、という問が發せられている。

ヒュームによれば、ある人がある「信念」を抱いているというのは、その人が抱いている「観念」に付加的な勢いと活気が付与されている、ということになる。ヒュームは、信念を次のように定義している。

「信念は、或る事物を想う様式の模様を替えるだけである。従って信念は、観念に付加的な勢と活気とを付与し得るに過ぎない。故に、所信ないし信念を以て、『現在印象と関係した即ち連合した生氣ある観念』⁽⁷³⁾と言え、最も厳密に定義できるのである。」

もし信念が以上の如きものであるとすれば、「ある人のある信念」と「他の人の別の信念」が両立し得ない時、それらのいずれが真でいずれが偽か、を判定する手段がなくなってしまう。そこから得られる結論は完全に懷疑主義的なものになってしまう。ヒュームは次のように述べている。

「あらゆる蓋然的推理は一種の気持に他ならない。我々が嗜好及び心持に従わねばならないのは、独り詩や音楽に於てだけでない。哲学に於ても同様である。私が或る原理を確信する時は、唯々、観念が普通より強く私の心を打つのである。また、私が一組の議論を他の議論より選ぶとき、私は唯々、二つの議論が心に与える影響の優劣に関する感じから決めるだけである。」⁽⁷⁴⁾

これはかなり絶望的な見解である。

* * *

バートランド・ラッセルは、ヒュームの哲学が持つ破壊力を最も真剣に取り上げた二十世紀の哲学者の1人である。ラッセルは、その著『西洋哲学史』で次のように述べている。

「ヒュームの哲学は、その真偽は別として、十八世紀合理性の破産を代表してい

(73) Hume, David: *ibid.*, p. 396. (同上, 160頁)。

(74) Hume, David: *ibid.*, p. 403. (同上, 170頁)。

る。彼はロックと同じように、経験と観察から得られる指示のみを追求して、それ以外の何物をも信頼せず、道理ある思索をし、経験論的であろうとする意図で出発した。しかしヒュームは、ロックよりも優れた知性を持ち、分析におけるより大きい鋭さを持ち、またロックのように安易な矛盾を受け容れるようなたちではなかったために、彼は経験と観察から何事も学び得ない、というさんたんたる結論に到達したのである。合理的な信念、といったものはないと彼はいう。『火は物を暖め、水を呑めばすがすがしくなる、というようなことをたとえ信じるとしても、その理由は、そう考えないことがあまりに多くの苦痛を招くことになるからにすぎない。』われわれは信ぜずにはおれないが、いかなる信念も理性に根拠づけられることはあり得ない。またある行動方針が他よりもより合理的である、といったこともあり得ない、なぜならすべての方針は等しく非合理的な確信に基づいているからだという。しかしながらヒュームは、ここまではっきりとは結論を出さなかったようだ。⁽⁷⁵⁾」

こうした合理性の自己反駁の後に、非合理的信念の大奔流がやってくるのは不可避であった、とラッセルは言う。そうした非合理的信念の典型的代表者がルソー (Jean Jacques Rousseau) である。ルソーは狂乱していたが影響力を持ち、ヒュームは正気であったが信奉者を持たなかったのである。かくして、非合理的信念の動きは、二十世紀の中盤に頂点に達したのであった。

「十九世紀および現在〔1946年のこと、吉澤註〕までの二十世紀を通じて非合理が成長してきたことは、ヒュームが経験主義を破壊した後に起ったこととしては当然であった。

したがって、まったくあるいは主として経験論的であるような哲学の枠内で、ヒュームに対する解答が存在するか否か、ということを見出すのは重要である。もし存在しないとすれば、正気と狂気との間に知的な差異はつけられないのである。自分はゆで卵であると信じている狂人も、少数派に属するという根拠によってのみ、狂人であると断定しうるにすぎない。あるいはむしろ —— われわれは民主主義を仮定してはならないのだから —— 政府がその狂人と意見を同じゅうしない、という根拠によってのみ、狂人という断定が下せることになる。これは

⁽⁷⁵⁾ Russell, Bertrand: *A History of Western Philosophy*, George Allen & Unwin, London 1946, Counterpoint ed. 1984, p. 645. (市井三郎訳『西洋哲学史』みすず書房, 昭和45年, 664頁)。

絶望的な見地であり、これから脱却するなんらかの方法があることを、希望しないわけにはいかない。⁽⁷⁶⁾」

4.2.3. ポパーとラカトシュ

(1) ポパーの「ヒューム問題」への解答

ポパーの哲学は、科学や合理性をヒュームの懐疑から救出できるのであるだろうか？ヒュームの主張する所を要約すれば、次のようになる。

1. 因果的推論は、感覚器官に直接提示されるものを超えて進められる。つまり、それは、未だ経験したことのない事物への推論である。
2. 因果的推論は、2つの事物の「恒常的连接」を観察することによって惹起される、人間の心の限定・方向づけに源を発している。
3. 相対立する「信念」に判定を下すための基準は存在しない。

* * *

4.2.2.(1)で、ロックは、①我々に生得観念はない、②すべての知識は経験に由来する、という2つのことを出発点としている、ということを描いた。ポパーはロックの出発点の内の第1のものを拒絶する。彼は、すべての有機体に生得的期待(innate expectation)が備わっている、と言う。そして、ある種の有機体は、時として、「経験から学ぶ」ことがあり、その期待を修正して行くことがある、というのである。

「われわれが期待の多くをはじめて意識するようになるのは、期待が満たされず当てがはずれるときにおいてだからである。一例は、路上で予期せぬでこぼこにでつくわす場合である。われわれは地表は平らなものと予期していたという事実をわれわれに意識させうるのは、まさにこの予想しなかったでこぼこなのである。このような当てはずれが、われわれの期待の体系の修正を余儀なくさせる。学習過程は、主としてこのような修正から成り立っている。つまり、ある種の〔当てはずれの〕期待を排除することにある。⁽⁷⁷⁾」

⁽⁷⁶⁾ Russell, Bertrand, *ibid.*, p. 646. (同上, 665頁)。

⁽⁷⁷⁾ Popper, Karl R.: The Bucket and the Searchlight: Two Theories of Knowledge, in: (次頁へ続く)

つまり、有機体には「期待」というサーチライトが備わっている、というのである（科学のサーチライト理論）。

* * *

ポパーの信奉する「科学のサーチライト理論」によれば、出発点にあるのは、知覚ではなくて、「期待」「仮説」「理論」といったものである。そして、ポパーにとって重要な問は、「科学者は経験から学び得るか?」「仮説をよりよいものに取り代えて行くことは可能か?」ということである。

「推測的知識：帰納の問題に対する私の解決」⁽⁷⁸⁾で、ポパーはヒュームの提示した難題に解答を与えようと試みている。運が良ければ科学者は仮説をより良いものに取り代えることができる、というのがポパーの答えである。ポパーは、ヒュームの提起した問題を次のように定式化している。⁽⁷⁹⁾

H_L ：我々がかつて経験したことのある〔反復的〕諸事例から、未だ経験したことの無い他の諸事例〔結論〕を推論することを、我々は正当化し得るか？

ヒュームにとってもポパーにとっても、この問に対する答えは「ノー」である。 H_L における幾つかの用語をポパー流の用語に翻訳すれば、次の定式化が得られる。⁽⁸⁰⁾

L_I ：ある説明的普遍理論が真であるという主張を、「経験的理由」によって、つまり、ある種のテスト言明または観察言明が真だと仮定することによって、正当化できるか？

「正当化できない」というのがポパーの答えである。いかに多くの真なるテスト言明も、「ある説明的普遍理論が真である」という主張を正当化することはできない。しかし、 L_I を一般化することによって L_2 が得られる。

Objective Knowledge, An Evolutionary Approach, p. 344. (森 博訳『客観的知識 —— 進化論的アプローチ』, 382-383頁)。

(78) Popper, Karl R.: *Conjectural Knowledge: My Solution of the Problem of Induction*, in: *Objective Knowledge, An Evolutionary Approach*. (『客観的知識 —— 進化論的アプローチ』, 第1章)。

(79) Popper, Karl R., *ibid.*, p. 4. (同上, 6頁)。

(80) Popper, Karl R., *ibid.*, pp. 7-8. (同上, 10-11頁)。

L_2 : ある説明的普遍理論が真であると、あるいは偽であるという主張は、「経験的理由」によって正当化できるか？ つまり、テスト言明の真理性の仮定は、普遍理論が真であるという主張か、あるいはそれが偽であるという主張のいずれかを正当化できるか？

テスト言明が真であるという仮定は、時として、「ある説明的普遍理論が偽である」という主張を正当化することを我々に可能にさせる、というのがポパーの答えである。 L_2 を L_3 に転換すれば、問題の所在が一層明らかになる。

L_3 : ある理論を他の競合的理論よりも、真または偽に関し、優先的に選択することは、「経験的理由」によって正当化できるか？

「正当化できる」がポパーの答えである。なぜなら、ポパーによれば、幸運な場合には、我々のテスト言明が競争しあっている諸理論の内のあるものを反駁 (refute) できるからである。もしそうなれば、「偽なることが確定されなかった理論」を優先的に選択することができるのである。

* * *

以上のようなポパーの議論に接した時、長年「ヒューム問題」に悩まされていた筆者は非常に喜びを感じたのを今も鮮明に覚えている。しかし、その喜びも長くは続かなかった。ポパーの弟子であるラカトシュが、ポパーの「素朴反証主義」を打ち砕いたのを知ったからである。筆者がラカトシュの議論を知ったのは、1980年代の半ば過ぎのことであった。

(2) ラカトシュのポパー批判

有限個の事例から説明的普遍理論を導き出すことはできない。つまり、複数の事例から一般法則を見い出そうとする「帰納 (induction)」の原理は成り立たない。ヒュームがこのことを明らかにした後、非合理的信念の奔流が生じた。こうした流れに対抗して、「合理性」を救済すべく、ポパーは反証主義を提示したのであった。「経験的理由」によって、ある説明的普遍理論を「立証すること (verification)」と「反証すること (falsification)」の間に存在する差異が、ポパーの立論の基礎を成している。例えば、次の2つの命題について考えてみよう。

1. すべてのカラスは黒い。
2. ここに「黒くない」1羽のカラスがいる。

第1命題は第2命題によって、簡単に反証されてしまう。このことを科学に当てはめると、次のようになる。

1. 科学理論（即ち、説明的普遍理論）は立証できない。
2. しかし、時として、科学理論が反証されることがある。
3. 従って、科学の営みとは、「事実（即ち、経験的理由）」の助けを借りて、誤った理論を捨てて行くプロセスである。

* * *

しかし、科学における営みは、上述の如き単純なものではない。ラカトシュは、2つの点から、ポパーを批判する。①「テスト言明」そのものが「理論」に依拠している、②科学者はポパーの論じたようには行動しない、というのがそれである。①から見て行くことにしよう。

ポパーの議論の核心は、「テスト言明が真であるという仮定は、時として、ある説明的普遍理論が偽であるという主張を、正当化することを我々に可能にさせる」、という点にある。しかし、日常生活においてはいざしらず、科学においては、テスト言明が真かどうか、ということそれ自体が問題となり得るのである。そして、理論的なもの（あるいは、仮説）が観察に先行する、と主張したのは他ならぬポパーであった。だとすれば、「説明的普遍理論 vs. テスト言明」という図式は、厳密に言えば、誤っていることになる。正しい図式は、「ある説明的普遍理論 vs. テスト言明の背後にある・別の説明的普遍理論」ということになる。

このことを理解する上での格好の事例が、1815年にエディンバラ大学出の医師プラウト（William Prout）が軽い気持で提出した仮説である。それは、「すべての純粋な化学元素の原子量は整数である」、というものであった。しかし、当時、プラウトの主張と折り合わない変則事例がかなりあった。ポパー流の「素朴な」反証主義によれば、プラウトの仮説は放棄されねばならない、ということになる。ところが、プラウト理論の擁護者は、当時の関連「実験技術」が信用の置けないものであり、テスト言明それ自体に難がある、と考えたのである。

「プラウト理論の擁護者たちは、…中略…自分たちの主張に対して反対証拠を呈している…中略…理論を覆すことに、専ら乗り出したのである。この作業のために彼らは当時すでにその学問的基礎を固めていた分析化学を改革せねばならず、それに対応して純粋な元素を分離してとり出す実験技術をも改良しなければならなかった。プラウトの理論は、実際、化学物質の精製にそれまで適用されていた数々の理論を次から次へと覆していった。⁽⁸¹⁾」

プラウトの仮説は1世紀の風雪に耐え、最終的には勝利を得たのである。この事例に鑑みるなら、素朴な反証主義は科学の発展にとって有害である、とラカトシュは主張している。⁽⁸²⁾

そして、ラカトシュの、ポパーに対する以上のような批判は、第2の批判（科学者はポパーの論じたようには行動しない）へと通じて行くのである。

* * *

科学者は決してポパーの論じたようには行動せず、このことによって、ポパーの素朴反証主義は「反証される」、とラカトシュは言う。ポパーの素朴反証主義は次のような性格を有している。⁽⁸³⁾

1. 科学においては、前もって合意された潜在的反証者を持つ斉合的な仮説が提示されねばならない。潜在的反証者とは、その時代の実験技術の助けを借りて真理値を決定し得るような「基礎言明（即ち、テスト言明）」のことである。
2. 制御された実験によるテストをくり返さねばならない。
3. 潜在的反証者が棄却されるならば、この仮説は「検証された（corroborated）」と宣告される。検証された仮説には、暫定的な支持が与えられる。
4. 潜在的反証者が受容されるならば、この仮説は「反証された（falsified）」と宣告され、放棄されねばならない。

(81) Lakatos, Imre: *The Methodology of Scientific Research Programmes*, Cambridge University Press 1978, paperback ed. 1980, p. 53. (村上陽一郎・井山弘幸・小林傳司・横山輝雄共訳『方法の擁護——科学的研究プログラムの方法論』新曜社、昭和61年、80頁)。

(82) Lakatos, Imre, *ibid.*, p. 55. (同上、83頁)。

(83) Lakatos, Imre, *ibid.*, p. 142. (同上、206頁)。

科学者はこのようには行動しない、とラカトシュは言う⁽⁸⁴⁾。一般に、科学者は自らの仮説と折り合いのつかない変則事例に対して、アド・ホックな補助仮説を案出するか、変則事例を無視してしまう、というのである。

「科学者は厚顔なのだ。彼らは事実が理論に合わないからといって理論をおいそれとは捨てない。そういう場合彼らは、通常は、新しく救済用の仮説を案出して、理論に合わない事実を、単なる一つの変則事例と呼べるようにしてしまった上でそれを説明してしまうか、その変則事例をうまく説明できない場合は、それを無視して、別の問題に関心を移してしまうのである。科学者は、変則事例や、手強い事例については語るが、反証事例については語ろうとしないことに注目しよう⁽⁸⁵⁾。」

(3) ラカトシュの「合理性」救済の試み

知覚を集積して知識に到るという「帰納」の原理は、ヒュームによって爆破されてしまった。ポパーの用語によれば、「科学のバケツ理論」〔4.2.1.(1)参照〕は破綻させられてしまった、ということになる。

ヒュームが導き出した、「経験と観察からは何事をも学び得ない」という結論は、全く嘆かわしいものである。ラッセルが述べた如くに、「まったくあるいは主として経験論的であるような哲学の枠内で、ヒュームの絶望的な見地から脱却するなんらかの方法があること」を希望しないわけにはいかない〔4.2.2.(2)参照〕。

ポパーのいう「科学のサーチライト理論」〔4.2.1.(2)参照〕は、科学や合理性をヒュームの懐疑から救出し得るのであろうか？ ポパーの提示した解答は、「仮説の提示 → 反証 → 誤った仮説の排除」というものであった。つまり、「素朴な」反証主義である。しかし、実際の科学における営みはこのようなものではない、ということがラカトシュによって明らかにされ、ポパー流の「反証主義」は反証されてしまったのである。だとすれば、議論はふり出しにもどってしまうのであろうか？

ラカトシュは、科学や合理性を救済しようと試みている。それは、バージョンアップされた「科学のサーチライト理論」である。科学の世界において起っているのは、「仮説の提示 → 反証 → 誤った仮説の排除」といったプロセスではなく、科学的研究プログラムと科学的研究プログラムの競争である、とラカトシュは言う⁽⁸⁶⁾。あ

(84) Lakatos, Imre, *ibid.*, p. 4, p. 126, p. 147. (同上, 6-7 頁, 183-184 頁, 214 頁)。

(85) Lakatos, Imre, *ibid.*, p. 4. (同上, 6-7 頁)。

(86) Lakatos, Imre, *ibid.*, p. 150. (同上, 217-218 頁)。

るいは、科学的研究プログラムは別の科学的研究プログラムによってのみ倒される、
 と言い換えてもよい。

こうした研究プログラムは、①堅い核 (hard core)、②防御帯 (protective belt)、
 ③発見法 (heuristic)、によって特徴づけられる。

「私が主張するのは、重要な科学的業績を記述するための形態的単位は、個々の
 仮説ではなく、研究プログラムだという点である。科学は、単なる試行錯誤では
 ないし、一連の推測と反駁の体系でもない。『すべてのスワンは白い』は、確か
 に黒いスワンが一羽でも見つければ反証されるかもしれない。しかしこの手のト
 リヴィアルで純然たる試行錯誤は科学とは言えないのである。たとえばニュート
 ン科学は、三つの力学法則と万有引力の法則という四つの推測の集合ではない。
 これら四つの法則は、ニュートンのプログラムの『堅い核』を構成するに過ぎな
 い。しかも、この堅い核は、補助仮説のつくる広大な『防御帯』によって、どん
 なことがあっても反証からは保護されることになる。さらに重要なことは、研究
 プログラムそれ自体も『発見法』つまり強力な問題解決機構をもっていることで
 ある。」⁽⁸⁷⁾

この「発見法」は、どんな路線を避けるべきかを示す「否定的発見法」と、どん
 な路線を採るべきかを示す「肯定的発見法」に区分される。否定的発見法によれば、
 「堅い核」を反証しようと試みてはならない。

「われわれはこの『堅い核』に対して否定的推論を立ててはならないことになる。
 そうする代わりに、われわれは創意工夫を重ねてこの核の周囲をめぐる防御帯を
 形成すべく『補助仮説』を練り上げたり創造したりさえせねばなら⁽⁸⁸⁾ない

他方、肯定的発見法は、膨大な数の変則事例に直面している科学者を、混乱から
 救い出すという働きをする、とラカトシュは言う。

「研究プログラムの肯定的発見法は、膨大な数の変則事例に直面している科学者
 を混乱から救い出す働きをする。肯定的発見法は、実在を表わす一連の次第に複
 雑さを増してゆくモデルを一覧表にして携えているプログラムを提示する。そし

⁽⁸⁷⁾ Lakatos, Imre, *ibid.*, p. 4. (同上, 7-8頁)。

⁽⁸⁸⁾ Lakatos, Imre, *ibid.*, p. 48. (同上, 71頁)。

て科学者は、自分が支持しているプログラムの肯定的部分に規定されている指示に従って自分のモデルを構築することに一意専念する。彼は現実の反証事例も、利用可能な『データ』をも無視するのである。⁽⁸⁹⁾」

* * *

競争し合っている複数の研究プログラムに対して、優劣の判定を下すことは可能だろうか？ ラカトシュは次のように述べている。

「ある研究プログラムを棄却する、つまりその堅い核と防衛帯を形成しているプログラムとを排除することに、（社会心理的原因とは反対に）何らかの客観的理由が存在することはありうるのだろうか。われわれの解答を概ね述べると、そのような客観的理由は相手の研究プログラムがかつて勝ち得た成果を説明し去り、発見能力をいっそう誇示することによってその相手のプログラムをのり超えてゆくような対立する研究プログラムによってもたらされる、というものである。⁽⁹⁰⁾」

対抗プログラムの成果をすべて説明し去り、対抗プログラムにない新事実予言能力を持つ、そのような研究プログラムが勝利する、というのである。しかし、事はそれ程単純なものではない。旗色の悪い研究プログラムの側で、たゆまぬ巻き返しのための努力が続けられ、そうした努力が最終的に奏功する、という可能性を排除することができないからである。4.2.3.(2)で見た、プラウトの仮説（すべての純粋な化学元素の原子量は整数である）のような事例も存在する。

このようなことにも十分目配りをしたラカトシュの主張は、どんどん煮え切らないものになって行くのである。

* * *

以上のような議論を踏まえて、野口 vs. 「市場原理主義批判」者の問題に立ち帰ることにしよう。両者の説に対して、優劣の判定を下すことは可能だろうか？

⁽⁸⁹⁾ Lakatos, Imre, *ibid.*, p. 50. (同上, 75頁)。

⁽⁹⁰⁾ Lakatos, Imre, *ibid.*, p. 69. (同上, 104頁)。